

アムールの風

正統右翼の論理

第10回 田中健之
(黒龍會会長)

第二章V 知られざる日本裏面史

大アジア主義の大義

似て非なる大アジア主義と大東亜共栄圏

今日、一般的に大アジア主義が発展して、大東亜共栄圏になったと言われています。しかしそれは、日韓合邦が日本政府によって、日韓併合にすり替えたのと同様で、似て非なるものです。

大東亜共栄圏は、アメリカのニューディール政策やイギリスとフランスのブロック経済政策を模して、日本経済を優先させるためのアジア経済圏を確立するべく、日

本の官僚が打ち出した政策が大東亜共栄圏です。そこには大アジア主義のように、アジア諸民族と精神的な繋がりによる共感から、日本とアジアが共に連帯を求めたものではありません。

要するに大東亜共栄圏は、アジア諸民族の文化伝統に対する理解と尊重を他所に、あくまでも日本のペースで、アジアの経済開発を推し進めてきた政策でした。

搾取と奴隷的な労働、愚民政策を貫いた、欧米によるアジア、アフリカなどに対する植民地政策と異なり、日本が唱えて実践した大東亜共栄圏は、アジア各地にインフラを整備し、教育を施すなど、アジア各地の発展と近代化に対して良い政策をして来たことについては勿論評価すべきです。しかし日本は、せっかく評価されるべ

き良い政策をアジア各地に施していたにも関わらず、何かにつけて、日本の様式を無理やりアジア各地の諸民族に押し付ける傾向が強くなった上、日本の官僚がマニユアル優先の政策を彼らに強要しました。

大東亜共栄圏に含まれているアジア各地は、当時、タイを除く全てが、欧米列強諸国の植民地下に置かれており、日本政府や日本軍は、こうした欧米列強諸国の植民併呑に喘ぐ、アジア各地に対して、大東亜共栄圏を確立するために独立を与えました。しかし、その独立運動や独立後の新国家建設は、あくまでも日本の主導で行われました。

日本が主導した独立運動については、私は思うところがあります。例えば今日、チベット、ウイグル、南モンゴルの独立運動において、中国から独立を求める彼らを日本人が応援することに対して、彼らは当然、有り難いと思っはいます。しかし、チベット人やウイグル人、そして南モンゴル人が不在で、日本人がリーダーになってしまっている傾向が見られる場合があります。それは本来、彼らが主体となって行うべき独立運動が、結果として日本人によってコントロールしてしまうことを、日本人の支援者や活動家は、改めて熟考する必要があります。

よくアジアやアフリカに学校を作る運動があります。それも結局、日本人が全てやってしまうため、現地の人たちが自分自身で学校を開くことができない、という皮肉な結果が生じることがあります。

発展途上国に対する支援とは、発展途上国の人々に、自主性を持たせるようにすることが、発展途上国に対する本来の支援なのです。

つまり、発展途上国に井戸を掘って与えるのではなく、彼ら自身に井戸を掘らせなければなりません。そのため井戸の掘り方を彼らに教えることこそが、発展途上国に対する真の支援なのです。

ところで、日韓併合の場合も朝鮮の文化伝統などを考慮せずに、日本が主導的に推し進めた、朝鮮の近代化がありました。

葦津耕次郎という神道家がいます。この人は福岡の箱崎宮の神官で、頭山満との関係が深い人でした。「神社新報社」を設立し、思想家として知られる葦津珍彦の父上です。

その人が著した『あし牙』という本があります。同書は日本政府によって発禁本にされました。

何故、発禁処分されたのかというと、『あし牙』には、朝鮮神宮についての批判が記されていたからです。

「韓国当初の神社(国家的神社)に、皇祖及び明治天皇を奉斎して、韓国建邦の神を無視するは、人倫の常道を無視せる不道徳にして、人情を無視し人倫を顧みざる行為なり。(老五老以及人之老は人倫の常道なり)必ず天罰と人怒を招来すべきものなり。然らば則日韓両族融合の根本たるべき、朝鮮神宮は反りて、日韓両民族乖離反目の禍根たるべし」

と、厳しく批判しています。

葦津耕次郎の素晴らしい慧眼は、日本政府に通じるはずはなく、むしろ治安を乱すものだととして、発禁として闇に葬り去られてしまいました。

頭山満と並んで、明治、大正、昭和の三代にわたって政財界に隠然たる影響を与えた、玄洋社の杉山茂丸は、旧一進会の会員たちから日韓合邦を併合へと日本政府によつてすり替えられたことに対し、道義的な責任を問われて、自決を要求されました。

日韓併合後の朝鮮に対する日本政府の施政の実情を憂慮した杉山は、大正十二(一九二三)年に、山本権兵衛首

相に宛てた『建白』を著し、朝鮮の施政改革を強く訴えました。

この中で杉山は、次のように記しています。

「朝鮮という幽霊は第一前統監に祟り、また次の統監に祟り、総理外務の両相に祟り候間閣下にも慥に祟るに相違無之候間決して朝鮮の事丈は不被思召万事当局者に御一任被成候方が宜敷と存申候」

今日の北朝鮮や韓国の反日的な諸々の問題は、まさに朝鮮という幽霊が日本に崇っている結果だと言っても過言ではありません。

今日でも尚、南北朝鮮の幽霊が日本に崇っているのは、日本が朝鮮にもたらした、日本への同化に対する恨みなのです。

——日本に失望したフィリピンの独立——

大東亜共栄圏に対して大アジア主義は、日本とアジア各地とが対等な関係にあり、アジア諸民族が日本のパートナーとしての共鳴と連帯感があります。

それを基本とした、アジア諸民族の側に立った独立運動などのサポートが、大アジア主義にはあります。それ

はあくまでも、アジア各地の民族や民衆自身の主体性に任せたものであり、日本人が主体となって独立運動や革命を指導するのではなくて、彼らの主体的な動きに対して、日本人は裏で援けることを鉄則としています。それが大アジア主義の大義です。

一方、大東亜共栄圏は、ニューデール政策やブロック経済に対抗するため、日本経済を保護するために確立したアジア経済圏です。従つて大東亜共栄圏は、アジア各地を日本の経済圏に組み込むために、日本の官僚が主体となって、日本に優位な政策が優先され、彼らがアジア諸民族を指導しました。そこには、アジアの諸民族独立運動に対する理解と同情をはじめ、民族や民衆の気持ちを汲むという思想も精神もありませんでした。

例えば、長年フィリピンの独立運動の中心であったアルテミオ・リカルテ將軍や、ベニグノ・R・ラモスらの志士たちは、大東亜共栄圏の中のフィリピンでは無視されました。

日本政府が、大東亜共栄圏におけるフィリピンで引っぱり出して来たのは、ホセ・ラウレルとかホルヘ・ヴァルガスといった人々でした。

彼らはアメリカが、フィリピンを統治していた当時の政治家や高官たちでした。

そのためフィリピン人たちは、大東亜共栄圏のために、日本がフィリピンに対して与えた独立は、日本がアメリカに取って代わって、フィリピンを支配しただけで、それは、アメリカ統治時代と何ら変わるべきものがないことを感じたフィリピン人たちは、日本に失望しました。

私たちが学んだ歴史では、軍部がアジアを侵略したという刷り込みがあるのですが、実際にはそうではなくて、どちらかといえば、大東亜共栄圏という経済政策を、日本の官僚が、日本で制作したマニュアルをアジア各地の諸民族に押し付けたことが、侵略的だという誤解を与えたのです。

そうした日本の官僚主義的な大東亜共栄圏の方法に対して、疑問を抱いていた軍人は少なくありませんでした。

——志と信念に殉じた日本軍人——

ところで、終戦後もインドネシアに残留し、彼らによるオランダからの独立戦争を支援した日本軍人たちは、「アジア解放」という大東亜戦争の大義に生命を懸けるべく、

インドネシアに残った人々で、清水斉、金子智一、中島慎三郎など色々な人がいました。

彼らはいずれも、頭山満や玄洋社の大アジア主義に影響を受けた人々でした。彼らは、徴兵によって兵隊にとられて、蘭領東印度諸島（インドネシア）に渡り、終戦後も現地に残って、インドネシア独立戦争に参加したのです。

今日の学校では、大アジア主義について習うことなく、大東亜共栄圏だけを教えられているため、大アジア主義と言えば、それは頭山満や内田良平といった右翼の主張で、それが発展して大東亜共栄圏になったのだ、という誤解をしています。

従って我々は、大アジア主義と大東亜共栄圏は似て非なるものだ、ということ強く認識する必要があります。

インドネシア独立運動を支援した日本軍人たちの実像は、大アジア主義を学んでいた人々たちによる大アジア主義の実践であり、それはまさしく欧米による植民地支配の下で搾取されたアジアの解放なのであり、その信念によってこの戦争を戦いました。

それが故に彼らは、大東亜共栄圏という、官僚主義的

になります。そこでボースは当時、日本に亡命中だった中華革命の指導者である孫文に相談したところ、彼から頭山満を紹介されました。

ボースからイギリス植民地下におけるインドの惨状と彼が置かれた立場を聞いて心を痛めた頭山は、例えそれが国法を犯すことになったとしても、彼を匿^{かくま}って、インドの独立を支援する決意を固めました。そこで頭山は、さっそく杉山茂丸や内田良平といった玄洋社や黒龍会の同志たちと相談をし、共にボースを匿^{かくま}ったのです。

ボースの隠れ家となった先は、今日、アンパンとカレーで有名な東京の新宿中村屋でした。

その後、頭山満は日本政府と交渉してボースの国外退去命令を取り下げさせて、日本政府に亡命を認めさせました。

ボースが引き続き、日本で安定した亡命生活を送ることが出来るようにと、中村屋の娘との間に結婚話が持ち上がり、二人は結婚することになりました。

これによって中村屋の家族の一員となったボースは、「中村屋のボース」と言って親しまれ、純インド式のカレーを中村屋に伝授しました。今でもそのカレーは、「恋

な日本優位のアジア経済圏の確立に決して走ることはなく、最後まで大アジア主義のアジア解放という大義と理想を貫き、その責任を全^{まっ}うした人々だったので。

彼らは終戦後も現地に残り、インドネシア独立戦争で壮烈な戦死を遂^とげた市来龍夫のように、自らが抱いた、アジア解放という大アジア主義の大義と理想に殉^{まっ}ぜんとしたのです。

「アジア解放」という、戦前から大アジア主義の活動をしてきた志士たちの実践的な活躍が見られてこそ、はじめて大東亜戦争は、聖戦だと言えるのです。

——インド独立を陰で支えた志士たち——

インドの独立運動は、まさに大アジア主義を実践した典型でした。

大正四（一九一五年）年来日した、ラシュ・ビハリ・ボースというインドの独立革命家の身柄引き渡しを、イギリスは日本政府に要求しました。これを受けた日本政府は、ボースに国外退去命令を出したのです。

もし、彼の身柄をイギリスに引き渡した場合には、当然ボースはイギリス当局によって逮捕、処刑されること

と革命のカレー」として、中村屋の名物メニューとなっています。

インド独立連盟を創設して、活動していた中村屋のボースは、ドイツに亡命していたスバス・チャンドラ・ボースを日本に呼び寄せます。

中村屋のボースは、若きインド独立革命家のチャンドラ・ボースに、インド独立連盟のバトンを渡します。こうしてインド独立運動は、日本を拠点に活発化します。

大東亜戦争中にチャンドラ・ボースがインド国民軍を率^{ひき}いて、日本軍と共にイギリス軍と戦ったことはよく知られています。

その頃、中村屋のボースは体調を崩し、インド独立を見ることなく、残念ながら五十八歳で他界してしまいます。大東亜戦争後にインド国民軍の将兵は、イギリスから国家反逆罪で裁かれます。ニューデリー軍事裁判です。それに怒ったインド民衆は立ち上がります。

「インド国民軍は、インドを植民地支配するイギリスにとって、反逆かもしれないが、全インド人にとってインド国民軍は、イギリスによるインドの植民地支配から解放して、自由なインドを建設するための兵士なのだ」と、

唱えたインドの民衆は、イギリスに抗議するために、インド全土でゼネストを断行しました。支配者であるイギリスに対して、激しく抵抗したインド民衆を恐れたイギリスは、インド国民軍の将兵全員を無罪にしました。

こうしたインド民衆のイギリスへの抵抗の結果、終戦から間もない一九四七年にインドは、イギリスから独立を勝ち取ったのです。

インド独立の記念日は、八月十五日。日本の終戦記念日と同じ日です。これは偶然ではなく、インド独立を支援した日本に対する感謝の意味から、インド独立記念日を日本の終戦記念日にしたのです。

ちなみにインドネシアが独立宣言を出したのが、一九四五(昭和二〇)年八月十七日です。

この時、インドネシアは元号として〇五年という数字を使っています。それは、時の日本が皇紀二六〇五年だったことに由来しています。

—— 打算のないアジアの連帯 ——

フィリピンの場合も、頭山満らの玄洋社の支援によって、日本に亡命したアルテミオ・リカルテ将軍もまた、大東

と時には対峙してまで、彼らはアジア各地の独立革命家の日本亡命を支援し、庇護し続けました。

それに対して日本政府は、欧米列強諸国よる外交的な圧力を恐れ、常にその顔色を伺っていたが故に、アジア独立運動に対して冷淡で、迷惑がっていたのです。

日本に対して大きな希望と期待を抱き、その救いを求めてアジア各地から日本に亡命を求めて来た、独立革命の志士や愛国者たちを、いとも簡単に宗主国の官憲に、引き渡そうとしました。

今日の労働力不足から、単純労働をする外国人労働者の受け入れを解禁するために、日本政府は入管法の改正を強行し、入国管理局を出入国在留管理庁に改組まで行いました。しかし、本当に政治亡命を求める人々に対して、日本在留許可が出ることは、極めて困難なのが実情です。

その一方で、出稼ぎのためあらゆる方法を駆使して来日する外国人に対しては、書類さえ揃えれば、簡単に在留許可を出しています。最近では、政治的に迫害と一切無関係な出稼ぎ外国人が、偽装で政治難民の申請をしている有様で、本当の政治亡命者の日本在留許可を一層、困難にさせています。

亜戦争が始まるとフィリピンに帰国し、マカピリ義勇軍を組織して、日本軍と共にアメリカ軍と戦いますが、リカルテ将軍は、過酷な戦場で戦病死を遂げました。享年七十八。

戦後、山下奉文将軍が、マニラの軍事裁判で裁かれた際、リカルテ将軍の孫、ビスルミノ少年が証人として出廷しました。

法廷においてビスルミノ少年は、「日本軍はフィリピン人に対して、決して残虐な行為はしなかった」と、はっきりと証言しています。

リカルテ将軍やその孫であるビスルミノ少年の生き方に見ることができると大アジア主義は、頭山満や内田良平といった先覚が、一切の打算なく、心からアジアの人々との連帯と支援を実践した結果、開花したものだだったのです。

日本に期待し、その救いを求めて亡命して来た、様々な民族独立革命家たちに対して、日本政府は実に冷淡でした。彼らを心から援けたのは、頭山満や内田良平のような民間の大アジア主義者がそのほとんどだったのです。

孫文や中村屋のボースを匿った時のように、日本政府

私は、出稼ぎ労働者の全てに反対しているわけではありませんが、彼らが日本で生活するための、しっかりとした受け皿を、日本政府が準備してから受け入れないと、欧米諸国と同様、日本人と出稼ぎ外国人との間に大きな確執を生み、対立や排斥、または食い詰めた出稼ぎ外国人らによる犯罪が生じます。また、日本人が脚を踏み入れることが出来ない彼らのコミュニティが形成されるなど、様々の深刻な問題が、日本国内で生じることは必ずです。これは、アジアの分断以外の何物でもありません。ここで話を元に戻します。アジア民族独立の革命家たちを駆逐しようとした日本政府と官僚たちが、大東亜戦争勃発と同時に、掌を返すようにして、大東亜共栄圏を唱えても、アジアの同胞たちは、誰もそれを信じるわけがありません。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。安洋社初代社長岡田浩太郎の園家の孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈遺徳を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所客員研究員、東京大学大学院教育学部客員研究員、日露露協会の長、2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に『韓国に祀られる人々』『昭和維新』『北朝鮮の終焉』『美は日本人が大好きなロシア』『横浜中華街』など。中央公論「正論」、『歴史群像』などの論壇誌に多数執筆。